1992年9月15日発行　1975年2月28日第3種郵便物認可

GREEN　EARTH

緑の地球

1992・9

8

●（座談会）
「山西省の緑化活動に参加して」
4面～6面

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
（送料共）

COM21　通巻302号　発行／COM企画室

編集／緑の地球ネットワーク（準）
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9－16　西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739（〒552）

地平線までつづく広大な植林地で、現地の人びとと一緒に植樹作業に汗をながす緑化協力団

GEN定例講座
「ネパール，森林破壊の現状と緑化への道」
●講　師／GEN代表世話人　佐野茂樹
●と　き／9月22日（火）6時30分～
●ところ／港区民センター
参加費／700円

自然と親しむ会
きのこ狩りと秋の自然観察
●と　き／10月18日（日）午前8時30分
JR大阪駅③番線京都寄りホーム集合
●ところ／北小松「元気村」　雨天中止
当日は現地できのこ鍋を楽しみます。
●参加費／500円

ワーキングツアーはスタディツアー

第二次緑化協力団団長
武田　繁典

第二次緑化協力団は、若者中心に本格的な植樹作業のワーキングツアーとする計画であった。12人の平均年齢は34歳。22歳以下が5人と、実に若々しく楽しい団になる予感がした。私が年長ということで団長という責任を負わされたことだけ少し気が重かった。

初日の夜行列車で寝台が半分しか取れなかったこと、渾源で腹痛、下痢、発熱に悩まされる者が続出したことなど、予期しないトラブルがあったが、みんなよくがんばったと思う。特に事務局の林さん、お医者さんの大久保さんにはほんとうにお世話になった。

ワーキングツアーといっても、植樹に関してはみんな素人で、緑化協力の訪中もはじめて。そんな中で、一人一人、新鮮で貴重な体験をすることができた。渾源県と桑干河流域の緑化事業の見学、各所での植樹作業、農家や学校、少年活動センターの訪問、それに恒山、雲崗石窟、木塔、故宮、万里の長城などの観光、そのうえ、各地での心温まる歓迎宴や懇談会と盛りだくさんの毎日であった。

緑化協力に関しては、技術援助は全くできず、実際の植樹作業もわずか5～6時間程度、資金援助でも今回の訪中記念に 500元、今年一年全部で10万元。これは国、省、県、郷あげて緑化に取り組んでいる予算に比べるとわずかでしかない。私たちのやったこと、やれることは本当にわずかしかない。それにひきかえ、現地の人たちに多大の迷惑をかけたようで大変心苦しい。私たちの役割は何なのだろうかと考えさせられる毎日であった。

「環境問題には国境はない」「緑化は人類共通の事業」「緑化協力は国どうしの平和な関係があってこそ可能」などのことばが心に残る。また、「実際にやった仕事はわずかでも、はるばる遠い所からきて交流したことは、私たちにも村人たちにも大きな励ましになったし植樹の大切さを再認識させた。今後も長く、広く交流を続けよう」こんな内容の話をしてくれたことが一番うれしかった。ほそぼそでも活動し続けることが大切であると思う。今回の旅は私たちにとって本当にいいスタディツアーとなった。感謝！

有効な協力をさぐるため 9月末から2か月、現地へ

世話人　高見　邦雄

おなじ「緑を守る」といっても、日本の都市でくらす私たちと、中国山西省の農山村に生きる人たちとでは、大きな隔たりがあります。豊かとはいえない渾源県の農民たちが、これまで穀物をつくっていた畑を樹林にもどそうとしていることには、私たちの想像もできぬ重大な決断があります。

そしてその決断と行動を持続し、生活の向上と環境の改善を両立させるには、もっとたくさんの社会的・経済的・技術的な問題をクリアしなければならないでしょう。

私たちの緑化協力は、単発の一時的なものにとどまらず、長期にわたる広範囲のものでなければならないでしょう。そしてその協力が有効なものとなるためには、現地に身をおき、現地の人びとといっしょに考える以外にないと思います。

この夏のワーキングツアーの参加者たちは、現地の状況を若々しい感性でとらえてきました。私はこの9月24日から約2か月、山西省雁北地区を訪れることになりますが、これまでのかけ足旅行ではとらえることのできなかった現地の状況をしっかり見てきたいと思います。

渾源県西留郷に建設されている1700ヘクタールの「日中友好交流青年友誼林」、北岳・恒山の「地球環境林」、そして来年からスタートする「桑干河青年緑化プロジェクト」への協力。これらを順調に発展させるための基礎となる現地の人びととの深いきずなを結びたいと思います。

これまで2度の訪問をつうじて、渾源県の人たちからは「ガオジェン（高見）は県民だ」といわれていますので、里帰りをする気分で……いってきます！

勉強になりました！つち博士・松尾さんの講演会

「地球環境を土から見ると」と題して開かれた松尾嘉郎さんの講演会は、日頃知ってるようで知らない、土の誕生から今日の土壌流失や沙漠化にいたる土の歴史を勉強させていただく良い機会でした。欲をいえば、もう少し現在の土をめぐる様々な問題に焦点をあてて、じっくり先生の話を聞きたかったし、質問したいこともありました。まず、松尾先生は水惑星としての地球のなりたちから話をされ、この地球が生命系として成り立つ循環の構造を説明されました。フロンガスの問題も地球温暖化問題などにもふれていただいて、わかりやすかったのですが、土に焦点をあてた循環の問題にもう少し時間をさいてほしかったと思います。

例えば古代文明が崩壊していった原因が、自然の収奪の結果としての土壌劣化だったことを先生も指摘されました。今日では南北問題に見られるようにグローバルな規模で土壌の破壊が進行しています。穀物や木材などの一次産品輸出国は膨大なその国の土の養分を輸入国に吸い取られ、土壌劣化が進んでいます。もちろんそれだけではなく、生産と消費の非循環的関係が自然環境に対する負荷を世界中で増大させていると思います。

豊かな生命をはぐくむ土を保つための循環が絶ち切られる一方で、土にかえることのできない工業廃棄物が地球上に溢れ、目に見えて環境は破壊されています。松尾さんの話は、土を破壊する文明のあり方を問い直すうえでたいへん勉強になりました。

山西省の自然
②黄土層

石原忠一
（第一次緑化協力団団長）

年間に人の背丈ほど雨のふる私たちの地域ではみられない景観が、黄土に覆われた山西省の自然です。

地球の陸地の10%を占める黄土地帯は、ミシシッピ川流域や北ヨーロッパにもありますが、世界一大きいのはなんといってもゴビ沙漠の東に広がる中国北部の黄土地帯です。

氷期と間氷期のくりかえしのなかで岩くずが風化し、日に照らされて乾燥して舞いあがり、偏西風に運ばれて、現在の高原地帯に厚さ数十メートルも堆積したのです。

粒子の大きさは 0.1～ 0.005ミリで文字通りの黄土色。たがいにしっかり組み合ってしまうため、垂直の崖に横穴を掘って、窰洞（ヤオトン＝住居）をつくれるほどですが、ひとたび砕かれるとパサパサの微粒子になります。ちょっとした雨にも流され、黄河の濁流となり、さらに黄海まで広がっていきます。これが水土流失であり、「暴れ龍」（大洪水）となって華北の大平原を襲うこともしばしばでした。

中国の青年たちは、黄河の両岸を幅5～10キロ、長さ1000キロ以上にわたって緑化し、さらに汾河、桑干河などを樹木で守る「緑の万里の長城」作戦にたちあがっています。

アルカリ性の強い広漠たる黄土地帯に森林をとりもどし、豊かな環境を復活させようとする壮大な夢に、私たちも惜しみない協力をしたいものです。

展示用パネル 絵ハガキができました。

【パネル】

ＧＥＮの海外での最初の協力地・中国山西省の自然と緑化活動を紹介する写真パネルができあがりました。

サイズはＢ３とＢ４版、１組15枚です。またより簡便に利用できるように、ワイド版の写真同じく15枚を２枚のパネルにまとめたものもつくりました。

黄土高原の厳しい自然環境と、その中でたくましく生きる人びとの笑顔、力強く前進する緑化活動の対比は感動的です。学校での文化祭や各種集会、ホームパーティ等、小規模でもかまいませんのでどしどし活用し、緑化への理解と協力を広範な人びとに呼びかけてください。

【絵ハガキ・テレカ】

「黄土高原に緑を！」の絵ハガキ・テレホンカードの販売に協力してください。絵ハガキはパネルと同様に黄土高原（中国・山西省）の自然と緑化活動を紹介したもので、１セット６枚・ 300円です。テレホンカードは２種類・50度数1000円です。製作費用については、第一次協力団団員の鳥谷行俊さんにその大半をカンパしていただきましたので、絵ハガキ１セットにつき80円前後、テレホンカード１枚につき 500円が収益となります。絵ハガキ１セットで、唐松苗で 150本、障子松なら30本、ポプラの大苗なら３～４本を贈ることができます。（絵ハガキは3000組、テレカは1000枚作成しました。）販売収益は全て緑化基金・苗木代として現地に贈り届けますので、みなさんの積極的なご協力をお願いします。

青春座談会

山西省の緑化活動に参加して

第二次緑化協力団にはじめて参加した若者たち。現地での植樹体験をつうじて、彼らの豊かな感性はさらにみがかれ、たくましくなって帰ってきました。この座談会には都合で全員参加できませんでしたが、三人の方に話をききました。（文責編集部）

峠の上で見た「夢の国」

――皆さん中国は初めてでしたね。まず中国の印象はいかがでしたか？

〔喜多〕日本にいる時は酸性雨がどうのとかフロンガスがどうとかと環境問題を堅苦しく考えていたけど、中国に行って実際植林やってると、そういう言葉を全く忘れてしまってましたね。帰国して、大阪空港から京都に向かう渋滞のバスの中で「あぁ、こりゃやっぱりおかしいなー」と。（笑い）

だから実際にむこうで植林している田舎のオジサンとかとは、すごいギャップがあるなと感じましたね。やっぱ生活がかかっているっていうのか、来年の食べ物がなくなるとか、水がなくなるとか、そういう危機感の違いですよね。

〔加茂〕日本で思っていた中国のイメージとは、やはりギャップがありました。私、中国の映画が大好きでよく観てたんですけど、その印象でいうと、たとえば「赤いコーリャン」とか「黄色い大地」とかでは、中国の自然をほんとにきれいに撮ってますよね。

ただ実際の中国には、かたや、公害に代表されるような知られざる側面もあって、強烈な刺激を受けたり、また人々と接するなかで、思いがけない形で中国の文化を感じて感動しました。

〔久保〕いろいろびっくりしたこととかあったけど、日本の昔って感じで、なじみやすかったですね。

着いた日の夜、北京駅での人の多さにはびっくりしたけど、その次の朝、大同に着いてみたら迎えの運転手の人が帰ってしまったとかで……、なんか時間とかぜんぜん気にせぇーへんとこあるねんなーと。もし日本人だったら「どーなってんのや」と大慌てして問い合わせたりすると思うねんけど「あー、なんや来ぃへんのんかー」という感じで帰ってしまって（笑い）。

おおらかいうんか、せこせこしたところがないなというのは、ずっと中国にいて感じてました。

それから、大同からバスで渾源に向かう途中の峠のうえで見た景色は忘れられない。夢の国みたい！　いま行ったらもうないかもね。消えてなくなってしまって……（笑い）。

――日本との感覚のズレとか、戸惑いなんかは感じませんでしたか？

〔加茂〕いろいろ細かい問題はあるのかも知れないけど、いったん中国に入ってしまうと、余り問題は感じませんでしたね。それぞれ、やはりその国のやり方だから日本の尺度とはあわないわけだし。

〔喜多〕やはり何回も行ったら近づいていけるんだと思うんです。今回は、なんだか「お客さん」扱いをされているようで、戸惑うところもありました。

〔加茂〕でも、私たちは一般の旅行者なんかとちょっと違う形で来てるんだってことを厚かましいけど中国の人たちも知っていただくと、その点は変えられるのではないかしら？　もてなしてもらって迷惑がるようなのは私たちだけかも知れないけど（笑い）。

あったかかった中国の人たち

――やはりすぐ溶け込むのは困難？

〔加茂〕むこうも、いきなりだと不気味に思うんじゃないかしら（笑い）。何度もでかけていって徐々にというのが一番いいんでしょうね。

例えば、訪問した未開放の所で思ったのは、住んでる人たちが見る外国人は私たちだけかも知れないのに、私たちが好き勝手にしてると日本人というのはそうだという印象を与えてしまうわけでしょう？

〔喜多〕言葉が通じる者同士でも難しいのに、いきなり中国の山村に入って、その日のうちに仲良くなったりするのは、やはり難しい。

あたたかく迎えてくれた

〔久保〕でも、変に言葉が通じるよりも、いっそ通じへん方が、良い面もあると思わへん？

どこやったか、肉団子食べたことあったやんかー。あれどこやったかな？

〔喜多〕大同じゃない。

〔久保〕そや、大同や！　あそこでね、裏道の方を見たら「牙」って書いてあって、これ何やろー？　動物の牙でハンコ作ってはるのかなと思って、パッと入っていったら歯医者さんみたいなんです。そしたら、むこうの人が、「おいで！　おいで！　」してはるんで、入っていって、ちょっと紙に書いたりして話したんです。どこから来たんかとか、いつ日本に帰るんかとか、そんなことだけだったんやけど、「またおいで」とかいってくれはって、すごい親切で温かいなと思ったんです。

もし日本だったら外人の人が来ても、タカられるんちがうか！　とか思って家の中まで入れたりしないと思うしね。やはり中国の人はあったかいなーと。

〔加茂〕それは私も感じました。日本では扉やドアなんかガチッと閉まってますけど、むこうはあけっぴろげでもう誰でも出入りできるというか、行き来できる感じで、とりわけ田舎では私たちを心から受け入れてくれてるというのはすごく感じました。

――黄土高原の自然環境についてのそれぞれの印象を聞かせてください。

〔加茂〕全体として見た感じは「天と地」って感じで、空がパッと広くって畑はずっと遠くまであって、森はほとんどないというのが印象ですね。

〔久保〕こんなとこまで人くるんかなーと思うようなとこまで畑作ってた。冬にはマイナス30度くらいになると聞いてたんだけど、あのだだっぴろい緑の草原を見て、ほんまにここがマイナス30度になるんかなーって思った。

大同県徐町郷の人びと

それと、雨がちょっと降っただけなんやけど、地面がすぐにユルユルになってしまって日本と違うなと思いました。

鳥がいない？　犬や猫も少ない！

〔喜多〕僕はときどき日本で山を歩いたりするんだけど、土の色が全然ちがうんだよね。日本のは湿った黒い土だけど、むこうのはいかにも栄養のなさそうなサラサラした黄色い土なんですよ。だいいち山に森がないし、落ち葉なんか全然ない。

それに鳥が少なかったですよ。スズメもあまり見なかったしカラスも見なかった。

〔加茂〕あっ、ほんと鳥は少なかった。

〔久保〕鳥だけじゃなくて動物も少なかった。私、もっと犬とか多いかなと思ったけど、そんないなたったし、猫もおらんかった。虫もあまり見んかったし、蚊とかもいなかったんちゃう？（うん、いなかった、と二人とも）

〔喜多〕それと、大同とかすごい空気悪かったですね。もう何年かしたら、ここで住民運動が起こるんとちがうか、とか（笑い）思いました。空の色も暗かったし。どうにかならんのかという気がしましたね。

〔久保〕渾源でね、夜、真っ暗になってからちょっと外に散歩に出たんですけどね、石炭のにおいが臭くて歩くどころではなかったんです。

鼻のとこハンカチで押さえてたんやけど、ふせげへんの。こんなとこ歩かれへんわとか思って、すぐホテルに帰ったけど、しばらく頭がガンガンしてました。空気はほんま悪かったわー。

〔加茂〕たしかにその面では、かなり野放しのような気がしました。

――ところでみなさんはどんなふうに植林をやったんですか？　場所としては西留郷、恒山、徐町郷の三か所で植林をして、あと苗畑での作業をやったんでしたね。実際に初めて木を植えてみた感想はどうでしたか？

〔久保〕やる前はもっとデッカイ木を植えるんかなと思ってたんやけど、こんなヒョロッとしたちっちゃな草みたいな苗木で（笑い）、「あっ簡単じゃん！　」とか思った。（大笑い）

それと、私が、なんか間違った方法で植えてたりして、枯れるんちゃうかとか心配になったりしました。

〔喜多〕正直いったら実働時間が少なかった。移動して植えたりしたんで移動の時間とか休憩の時間が多くてそんな働いた気がしなかったですよ。

行く前は、朝から晩まで、まる一日働く気でいましたので（みんな「そうそう、気だけはあったよね」）。

〔久保〕むこうの人は「労働力は期待してない」とか言ってはったんやけど、それにしてもあんまり役にたたんかったんちゃうやろか。

ここも緑に変わる！　と思うと…

〔喜多〕西留郷の日中青年友誼林は、やったら広くて、遠くの方に結構固まった緑のブロックがあって、かなり頑張って植えてたんだなーとわかった。ここも今からあんななるんかなと考えて規模の大きさに気分もふくらむのを感じました。

どこにいっても、村は小さかったけど植林地のスケールがすごく大きかった。よくやるなーと、やる気があるんだなーと感じましたね。

〔加茂〕恒山は思ったより緑が多かったですね。大きな木もあった。でも木の数はまばらだったし、時折バサッと崖になってて、そこの木の根が剝き出しになってたりして……。

――今度の経験をもとに若者の役割といったことをどう感じましたか？

〔喜多〕木を植えて育つまで長い年月がかかるから、一回行っただけじゃあ意味がない。このワークツアーがこれからも続いていくよう、いろんな若い人に勧めていきたいと思います。

ひとりで何回もというのは、お金もないし無理だから、別の人に行ってもらって、経験とか自分たちの役割をつないでいく、そんなことかな？

むだな回り道でも、それが大切

〔加茂〕私は今回中国に行ってほんとに良かったと思ってるから、友達にも率直に話しています。

むこうに行く前に、ある友達から環境とか考えてるんなら、ワーキングツアーという方法は効率が悪いんじゃない？といわれたりしたんです。

確かにそういう面もあるかもしれませんが、こと緑化に関しては最短距離を追い求めるのはどうかと思います。色々な側面、例えば人間同士のコミュニケーションも不可欠ですよね。一見緑化には関係ないような回り道をしながらでもなんとか誠意を伝えようとすることに意味があったと思うんです。

緑化基金を集めてお金を送ることはもちろん大切ですが、そのお金がどこでどのように役立っているか自分のからだで具体的に経験しないとわからないことも

あるわけです。

その点でも、行ってきた人が、精一杯伝えるということが、私たちの義務じゃないかという気がします。

〔喜多〕日本のようなギスギスした味気のない都会に住んでて、ある程度は余裕があって、そんな中で「何かやりたいなー」という感じで植林に行った口なんですよ、僕なんか。

似たような人は他にもいっぱいいると思うし、どんどん現地に行ってほしいと思いますね。そこできっと変わるきっかけがつかめると思う。

〔加茂〕こういうことって好き嫌いもあるから一番いい方法とかいえないんだけど、例えば、帰ってきて友だちとかに話してみて気づいたのは、日頃ぜんぜん興味なさそうな人でも、しゃべってみると、どこかに関心を持っていたりするんです。

ただ、そのあとどうするとか、方法が、いまいちわからない。私もわからないんです。でも私にとっては、自分の経験を話すだけでも大事かなと思いますし、できればワークツアーに参加して、自分の目で見てもらえればもっといいと思います。

植木にも水やらん人が…でも…

〔久保〕家族の者にいわせると、家の植木にも水やらん人が中国いって木植えるんか？（笑い）ということなんだけど、そういう頑張っている所には応援してあげたいと思います。

私からみれば、ボランティアの人らは、ぜんぜんお金にもならへんことをやってはるわけですね。ちょっとでも負担になっていややなって思ったら、もうボランティアじゃないわけで、すごい難しいと思うんですね、それを続けていくのは。

誰も環境が悪くなってもいいとは考えてないと思うけど、ふだんそういうことを考えない人って多いでしょう？

だから、その時だけ声を大きくして言っても駄目で、時が過ぎてもずっと言い続けなあかんし、それは難しいことです。とくにマスコミなんかでブームになってるでしょう？　なんか「はやりの漫画」みたいにしかとられなかったりするんとちがうかなーと思うと、声も小さくなるんよね。

〔加茂〕そうですね、ひとりよがりになってしまう恐れもありますよね。

〔喜多〕自分の生活のしかたとか、その辺をまず変えていかんと声は大きくならない。エコロジーといいながら紙コップなんか使ってられへんから。

〔加茂〕環境問題に私は関心があるといっても、ひごろお箸を持ち歩いている、それだけとか（笑い）。それで終わっちゃってたらどうかと思うけれども、どういう方法でというのは、ほんと難しいですね。

何かがふっきれた来がして……

〔喜多〕環境問題って、明日にも地球はなくなるみたいな感じあるでしょ？そういう深刻さはなじめないよね。

ずうーっと考えてても、いろんな本読んでも、その問題と自分との距離がうまくつかめないから結局頭の中でクルクルまわってるだけで行動に移っていけないんだよね。でも、そういうのは実際動いてからでないとわかんないものだと……。

旅の思い出話はつきない（座談会）

そういう意味で今回は中国に行ってけっこうふっ切れたなって気がする。それで次に何をするかっていうことをいま考えてるんです。この秋にでも、ちょっと僕なりに行動に移せたらなと思っているんですが。

——最後にひとことずつ……。

〔久保〕ほんとは貧乏旅行するつもりでいたから、今回は旅費とか、ちょっと負担だった。船で行くとか、いつでも行きたい時に行けるようなふうにできへんのやろか？　できればネットワークの宿泊所みたいなものが現地にできたらいいんですが。

〔加茂〕回を重ねたら必ず意義のある交流になっていくと思います。ぜひ現地の宿泊施設の方も実現してほしい。

〔喜多〕ワーキングツアーのありかたなんですが、むこうの人たちと目に見える仕事を分担してやりたいですね。できれば西留郷とか徐町郷とか同じ所にずっといて、そこの村の人たちと同じメシを食ってというふうにしてほしい。観光とか、あれはあれでまーね。いいんかもしれないけど（笑い）。

〔加茂〕現地での交流とかでね、むこうの方の意見も聞けたら良かったと思うんです。

「緑の地球ネットワーク」のありかたとか、なぜ植林に来たのかとか話して、それに対して現地の人は、私たちの行動をどう思ってるのか、もっと意見を交換したかったですね。

〔喜多〕そうそう、それもむこうの上の偉い人たちじゃなくて、そこで働いているオッチャン・オバチャンとかがほんとにどう考えているのか、本当はそれが一番知りたかった。

——ぜひ、そうしたことが実現できるように努力したいと思います。どうもありがとうございました。

久保朋子
（くぼ・ともこ）
22歳・無職

喜多亮夫
（きた・あきお）
20歳・学生

加茂わかな
（かも・わかな）
19歳・学生

特別寄稿

アラビア湾原油汚染除去作業に参加して

橋爪新太（北摂住民運動センター）

「戦争こそ最大の環境破壊である」とは、これまでも言われてきたことですが、湾岸戦争でそれをみせつけられました。

多国籍軍の爆撃機は、2基の原子炉を破壊しました。稼働中の原子炉が軍事的に破壊されたのはこれが初めて。

パウレル統合参謀本部議長は、1月29日のブリーフィングで、「原子炉はがれきの山と化した」と平然と語ったが、これらの原子炉は国際査察で軍事転用の可能性がないとされていたもので、あえて放射能汚染を意図した攻撃とも思えます。

日本の湾岸戦争加担に抗議する行動に参加しながら、もしかして、これがイスラエルを巻き込んで、核戦争に拡大するのではないかと不安を覚えたものでした。

サウジアラビアのクウェート国境付近まで報道管制を突破したＴＶチームが、流出した原油にまみれた水鳥の姿を撮りました。

「環境」デマで勝ったブッシュ

報道が流れた6時間後には、ブッシュ米大統領が、サダム・フセインの原油流出作戦だと声明を発表し、動物愛護の情に厚い米国世論に訴え、米国内の反戦運動は鎮静してしまいました。

記者会見で、原油汚染の原因は、攻撃で沈没したイラクのタンカーからのものと訂正され、ブッシュ声明はデッチ上げだったのですが、フセインは手段を選ばぬ環境テロリストという評価が一人歩きすることになりました。

なんとか戦争の拡大を阻止したいと思っていたとき、環境問題がクローズアップされたので、「ひしゃくを持ってペルシャ湾へ行こう！」「国境に対峙する 100万の将兵に武器を捨てて油をすくえ、と呼びかけよう！」と環境義勇軍を募ることになりました。

200人が応募して、世界世論に訴えよう、という結成式の日に地上戦が始まり、大量殺戮ののち、戦争は終わりました。

自衛隊掃海艇の後を追いながら、6月に視察・交渉のためサウジアラビアとカタールを訪ねたところ、炎上する油田の煙で空は曇り、例年より気温が10度も低いとのこと。

マングローブ林で原油の除去作業中の橋爪さん

マングローブ林を救おう！

海上の油は片づけたものの、数百キロの海岸は油まみれで放置され、海中の被害は調査もされていない状態でした。

それでは、私たちは瀕死のマングローブ林を救いましょう、と話がまとまり、資材を整え、チームは休暇を取って準備していました。ところが、出発直前の9月に、サウジアラビアから延期の通知が舞い込みました。

カタールへは11月にでかけ、現地のボランティアと一緒に海岸を清掃し、歓迎されましたが、サウジアラビア政府は態度を転々として受入態勢が進まない。もう問題ないともいう。湾岸協力援助資金の分け前を狙った日米企業が横ヤリを入れているらしい。

それでもようやく、今年の3月、再調査と油除去にでかけました。

海岸は油まみれで放置されたまま。マングローブは、根本をアスファルトで固めたような窒息状態でした。

私たちは、空輸したポンプで水を吹きつけ、ショベルで油をはがしていきました。かなりの手間がかかる。

なぜ、もっと早くから自然回復の努力をしなかったのかと、一部枯れてしまったマングローブの群落を惜しむ。

固化した原油をクワではがす

砂漠地帯に海水で育つ植生は、魚介の産卵や野鳥の繁殖の場としてかけがえがないというのに！

砂浜に打ち寄せた原油は、固化して舗装道路のようになっています。日本から持っていったクワで数センチはぎとれば、きれいな砂浜がよみがえる。これでカニや貝類が豊富だった自然が回復するはずです。

7人で1週間かかって、海岸線20メートルがきれいになりました。まだ延々 200キロメートルは油まみれのままです。しかし、1000人くらいの人が、何ヵ月かコツコツ作業すれば、生態系上で貴重な海岸の回復ははかどるはずです。

作業を終えた最後の夜、ホテルに気象環境庁の高官が、謝辞を述べに訪ねて来ました。

「別の事業に追われて海岸の清掃が遅れたが、必ず自然は回復させます。今度くるときにはきれいになっているでしょう」と、その高官は請け合いました。

もっとも、戦争には 800億ドルつかっても、環境に金を出すつもりは毛頭政府にはありません。

ちょっと ひとこと

自分のサイズ

奈良県五条市 岡 美波

奈良県五条市とその周辺には、すでにあるゴルフ場に加えて、いくつかのゴルフ場建設の予定があります。吉野川流域にゴルフ場を建設することに反対する運動は、「水源を守る五条市民の会」という形で何年か前に出発しました。私は会員ではありませんが、その呼びかけの集会には何度か出席しました。今回、この運動が実り（バブルの崩壊による事業の整理が直接の原因ですが）一つの業者が撤退することになったとの報告を受けました。ひそかに会に拍手を送っています。

破壊されつつある地球環境に目をむけ、自分の足元から、あるいは地球規模からと、あらゆる処で、いろいろな人たちが少しずつ少しずつ動き出し、その動きは広がりつつあります。そんな動きを知りながら、では自分に何ができるのか……と考えるとき、ひとにはそれぞれのサイズがある、と思うのです。

どの運動もいいことばかりです。あれも、これも……とねがうとストレスばかりたまります。だから私は、自分のサイズに少しの努力分を加え、出来ることを続けていこう、と思っています。

あとで悔いることが、少しでも少なくてすむように。

GEN・入会のご案内

GENの活動は、緑の地球を取り戻すために、汗を流し、知恵をしぼり、お金を出し合ってくれる人びとにより支えられています。

あなたの力をかしてください。そして、GENと一緒にアジアに木を植えにいきませんか？

『古都奈良は水で滅ぶ』

著者 前 圭一

奈良市の東部山間では今、7つのゴルフ場計画をはじめ、大規模な開発計画が目白押しの状態となっています。この開発計画の全容を解明し、水源地の危機を警鐘する本が8月に出版され、注目を集めています。著者は、奈良市の東部出身でゴルフ場反対運動のメンバーとして活躍されてきた前圭一さんです。

発売元 機関紙共同出版
京都市上京区新町通丸太町上ル春帯町350
☎075-252-1788
定価 680円

10部以上は直接著者に連絡すると割引してくれる。連絡先 前圭一さん
奈良市七条西町1-15-1 ☎0742-46-8409

編集後記

今号から「緑の地球」編集体制を二班に分けて、紙面の充実をはかることになりました。GENの活動が広がるにつれ、同じ編集スタッフでやっていくことは負担も大きく、一号おきのローテーションを組んで、誰でも参加しやすい編集体制をつくりたいと思ってきました。幸い、出版・編集や企画などの仕事をしている方が数名、指導にあたってくれることとなり、今号から実現の運びとなりました。

しかし「オアシス100 FX2」で編集作業のできる人が足りません。どなたかこの際ワープロ編集を覚えたい、と考えておられる方がいましたら、ぜひ編集部まで、ご連絡ください。

みんなで作る「緑の地球」を実現しましょう！

（T）